

発 明 文 化 論

〈第 37 回〉

丸山 亮

町おこし

千葉県印西市が主催する町おこしの社会実験「舟めぐりと街歩きの旅」の募集に応じ、参加してみた。利根川や手賀沼がある内陸の町だが、合併によってできたため、まとまりや独自性に乏しい印象がある。東京への通勤圏に位置し、大規模な郊外型のショッピングセンターが近県からも人を呼んでいるようだ。市としては、こんな印西市に特徴を持たせたい、市民やその他多くの人に市のことをもっと知ってもらいたいという思いもあろう。募集は新聞の案内で知った。

土づくりを重視し、できるだけ農薬を使わない農業をめざす苗木屋で、参加者の一行とともにまず畑のさつま芋掘りや、ねぎ、大根の収穫を体験する。ここは苗木の生産と、野菜の販売で生計を立てている。その畑は、まず土作りから。広報を兼ねている若夫人が言うには、近くのゴルフ場から落ち葉をもらってきて堆肥を作り、土に入れているのだという。収穫した野菜や苗木はインターネットで注文を受け、売られていく。生産者と消費者が直接結ばれる仕組みが、農業経営を安定化し、里山に囲まれた都市近郊の農業を支えている。昼食には一行と共に、取れたての野菜を揚げた天ぷらや赤飯などを味わったが、これぞ本物の味だ。

午後は、成田線木下（きくだり）駅前の商店街で行われている骨董市をひやかす。木下という名称は、かつて利根川の水運を利用して材木を運んだところの名残で、現在はシャッター通りになりかかった商店街が、賑わいを取り戻すのに懸命だ。骨董市は平成 15 年に始まり、毎月第 1 土曜の市は千葉県でも最大級といわれるまでに育った。皿や漢籍の掘り出し物を手に、国登録文化財となっている町屋づくりの家、武蔵屋へ。江戸以来、旅籠や回漕店だったものが、明治末から大正初めの利根川堤防改修工事に伴い、街路に面した現在地に移築されたという。寄棟造、瓦葺で間口の広い家が、あたりでひととき目を引く。現在は市民団体「木下まち育て塾」が管理する「まちかど博物館」として公開され、ボランティアのガイドが来歴を語ってくれる。

江戸時代の地理書として名高い利根川図志には「寛文のころ此処に旅客の行船（世に木下茶船といふ）を設けたるに因りて、甚だ繁栄の地と為れり」という記述とともに、川舟と舟宿がにぎわう挿絵がある。その船旅を現代に蘇らせた川めぐりの観光船が、利根川堤の脇を流れる六軒川から弁天川、手賀川にかけて運行されている。一行が乗り組んだ舟は、公民館わきの発着所を出発。すぐ横には、利根川堤が何度かの改修でかさ上げされていった様子がみられる。そして、川が氾濫しそうな時には高水を利根川にかき出すポンプ施設がある。舟のガイドはまず、この一帯がかつて洪水のたびに水に浸かっていたのが、ポンプのおかげで被害がなくなったという歴史を語ってくれた。手賀沼に入ると、こぶ白鳥の親子が浮かび、のんびりした水郷風景が広がる。船頭はこの沼で天然のうなぎを取る漁師も兼ねているが、獲物はすべて契約先の料亭に買い取られ、一般の口の上ることはないようだ。手賀沼は徳川吉宗の時代、新田開発が行われたものの、利根川の洪水に見舞われるなど、本当に成果が上がったか疑問視されているとガイドはいう。

船を下り、一行はショッピングセンターの脇に設けられた観覧車に乗って市域を見下ろし、一日の旅を終えた。印西市の町おこしでは、里山や河川、湖沼の自然景観、古民家の歴史遺産と、土地の記憶の語り部、骨董市のような非日常の祝祭化と、客の呼べる商業施設を梔子にしようとしている。これらを組み合わせて移動に便利なレンタサイクルでまわれるようにし、さらに近隣の他の都市ともネットワークで結べば、いっそう効果があがるだろう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)